

2024年5月26日 No. 3721

先週の講壇から

〃 変えられる喜び 〃

使徒言行録 第7章1節～8節

聖句「神はアブラハムを…お移しになりましたが、そこでは財産を何もお与えになりませんでした。一步の幅の土地さえも。」(7:4,5)

1. 《舵を返す》 牧師に成り立ての十年は、意気込んでいて、厳しい説教（人の心に鞭打つような不人情な説教）をしていました。余り気負いすぎると、折角の福音も雑音や騒音としてしか受け止めて貰えません。「教会という、この地上の舟を御するのは、神の出来事以外にない」「私たちには、既に御言葉と御業という舵が与えられている」と語られた牧師が居られました。教会は「舵」を、私たちの「歩むべき道を御存知」の神さまにお返しして、生きるべきなのです。
2. 《固定する》 舟の譬えは卓見です。教会は地上にありながら、この世に縛られるものではないからです。一つ所に縛られるべきではないことは「ステファノの説教」に示されています。アブラハムの召命から出エジプトの出来事までが語られていますが、民が神殿を建て、神との出会いの場所を固定化すること、限定することを、神さまは望んで居られないのです。律法もまた、律法主義に陥ると、御言葉の自由な働きを否定することになります。そうすると、本来「神の恵み」「福音」であったはずの御言葉が、人を抑圧して支配する「呪縛」と化してしまうのです。けれども、ステファノを最高法院に訴えた人たちは、そのような支配体制が「変えられる」ことを恐れていたのです（6章13節）。
3. 《案山子神》 ステファノは族長たちの故事や出エジプトの物語を通して、どのようにして神は人間に出会われるか、働きかけられるかを説きます。信仰者がどこに行こうと、どこに住もうと、神さまは共に居られ、アッと驚く「新しい事」を為して、私たちを固定的な状況から解放されるのです。「煮詰まっちゃった」私たちを自由にしてくださるのです。律法の中身ではなく「器」を守ろうとするのが偶像崇拜です。煮詰まった状態で、神殿や組織や制度を固守すると、神を人間の奴隷にしてしまうのです。預言者エレミヤは、そのような神を「きゅうり畑のかかし」と呼びました（エレミヤ書10章5節）。ペンテコステの聖霊は「風、炎、音」という固定化されないもので表現されています。新しい事を為し、私たちを変える神が、私たちを自由にして、真の喜びを与えて下さいますように。

朝日研一朗牧師